第１号

日付　2018 年 6 月 19 日
発行者：斎藤　純

上智大学理工学部経営者の会　通信

■　インド通信　（１号）
□　東北通信　（　号）
□　大阪通信　（　号）
□　東京通信　（　号）

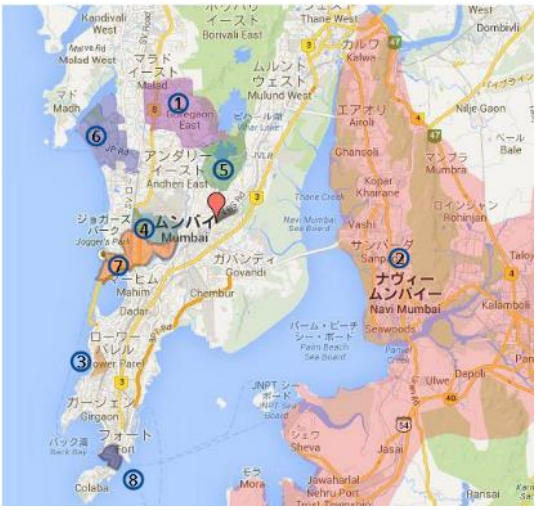
●ご挨拶

この度、インド通信を発行させていただきます斎藤と申します（81 物理卒）。昨年いっぱいで約３年間のインド子会社への出向（現地駐在）を終え日本に帰任しておりますが、インドでの「ものづくり拡大」のため、今後もしばらくはインド出張が続きそうです。現在、武蔵国鴻巣宿（埼玉県鴻巣市）の自宅で妻と二人暮らしです。

●インド・ムンバイへのルート

インド最大の都市ムンバイ(英語名ボンベイ)に隣接して建設された計画都市「ナビムンバイ(ニュー・ボンベイ)」が、小職の赴任地でした。人口 100 万人超の都市ですが、住んでいる日本人は 10 名未満でした。最寄空港はムンバイ（正式名：チャトラパティ・シバージー国際空港）です。成田から ANA が、1 日 1 往復で直行便を飛ばしています。

以前は、44 席の小型ジェット(ボーイング 737)でしたが、2016 年４月から、169 席のボーイング 787 に機体が変更され、利用しやすくなりました。速度も上がり、成田から往路 10 時間、帰路 8 時間ほどです。この便以外にも、デリー経由、バンコク経由、シンガポール経由など多々ありますが、移動で丸一日かかってしまいます。



●７つの島々が巨大都市ボンベイの始まり

右の地図で、ムンバイは半島だということがおわかりでしょう。ここには元々、7 つの島があり、ポルトガルやイギリスによる埋立てによって現在のような半島になったそうです。周囲の海はもちろん、アラビア海です。

●チャトラパティ・シバージーさん

さて、空港のほか、世界遺産のムンバイ中央駅もチャトラパティ・シバージー・ターミナスという名称です。この人は、17 世紀に、侵攻してきたイスラム勢力と戦い、この地にヒンドゥー教の王国を創立した将軍（その後、初代国王）だそうです。ムンバイのあちこちで、この人の像を見ることができます。
右の写真が、世界遺産の中央駅です。遺産とは言っても、現役で使われている駅です。

●宗教

大多数は敬虔なヒンドゥー教徒です。儀式の際は、額にビンディーと呼ぶ、赤いマークを付けます。神様にお祈りする日には、会社にもヒンドゥー教のお坊さんが来ます。オフィスに臨時の祭壇を作って、皆で「お経」のようなものを「歌い」、お祈りして、お菓子を食べます。当然、駐在員も仕事を中断して参加するよう求められますし、額にビンディーを塗られます。なお、ヒンドゥー教では、親同士が決めた相手との結婚が定めで、その時までは「未経験」でいなければならないそうです。ムンバイのような都会ではともかく、農村地帯でこの掟を破るのは命がけのようで、村内でリンチ騒ぎが起きたりするようです。次に多いのがイスラム教で約 20%、3 番手がキリスト教です。小職の運転手はイスラム教徒でしたので、ラマダンやら何やら、言っていました。イスラム教徒は姓でわかりますが、灼熱のインドでも、女性はご覧の通りの服装で頑張ります。

●お墓

ヒンドゥー教では、亡骸は火葬し、聖なる川に流します。ガンジス川が有名ですが、インド各地に、その土地土地の聖なる川があり、遺灰を流します。ただ、火葬する費用も出ない貧困層では、遺体をそのまま流してしまうこともあるようです・・・・・。

というわけで、インドにはお墓がありませんし、戒名のランクなども存在しません。インドは未だに奴隷制度のような身分制度(カースト制)が染み付いていますが、あの世では一切の差別が無くなるということでしょうか。

●ターバン

インド人男性というと、ターバンを巻いているイメージがありますが、あれはシーク教徒という少数派で、実際、あまり見かけません。体に刃物を当ててはダメという宗教上の縛りがあり、頭髪もヒゲも伸び放題です。ターバンの中を見たことはありませんが、髪の毛が収納されているとのことです。右の写真はタワービールを撮影したのですが、向こうにシーク教徒さんが写っています。

●世話好き

インド人はとても世話好きです。ムンバイのような大都会でも、隣近所同士で助け合うのが普通です。赴任した年は少雨で、その年の 12 月から翌年の 7 月中旬まで、毎日水道の断水が続きました。水道から水が出るのは、朝 7～9 時と夜 7～9 時の、1 日 4 時間だけ。それ以外の時間には、トイレは流れませんし、シャワーも使えませんでした。洗濯も調理もできません。その事態が発生する前日の朝、ヒンディー語で説明があったのですが、小生はちんぷんかんぷん、それを察した隣家の奥様が、やさしく英語で説明してくれました。

●メイドさん

会社以外で、インド人社会との接点を持とうという思いもあり、小生は自腹でメイドさんを雇いました。彼女たちは、カーストの下層階級で教育も受けおらず、英語はもとよりヒンディー語も話せません。話せるのは地元の言語であるマラーティ語です。毎日 1 時間ほど、家の中やベランダを掃除してもらって、月給 2 千ルピー（約 3,400 円）。彼女は、断水で昼間水道が使えなくなると、水の出る時間に、いくつもの大きなバケツに水を汲み置きして使っていましたが、トイレにもバケツを置いて、毎日水をいっぱいにしておいてくれました。お陰で、断水中も安心してトイレを使えました。紙に絵を書いたり、スマホのアプリを利用したりで、意思疎通には苦労しましたが、大変お世話になりました。感謝感謝です。日本への帰国を告げると、悲しそうな表情を見せましたが、小

宅のインド人オーナーに、とても良い人だったと話してくれたそうです。なお、駐在中に 2 度、日本から家内を呼びましたが、床に膝まづいて家内の足先にオデコを付け、最敬礼してくれました。現在、彼女は小生と入れ違いでインドに駐在した営業マンのメイドをしてくれています。

●熱帯性モンスーン気候

ムンバイのあるインドの中緯度地域は、熱帯性モンスーン気候というのだそうですが、12 月後半から 1 月いっぱいが最も低温になります。低温といっても、早朝の気温が 18℃、日中 30℃で湿度が低く日本人には快適です。インド人は寒い寒いと上着を着ますが、皆、風邪を引きます。この時期は乾季なので、雨は全く降りません。前項で触れたように、水不足になりやすい時期です。ムンバイ観光されるならこの時期ですが、北部のデリーや東北部のコルカタ（カルカッタ）では朝の気温が 5℃以下になったりしますので、要注意です。

2 月になると新聞に「夏が来た」と出ます。インド桜（右上の写真）が咲き、月末には早朝でも 24℃くらいになります。3 月は更に暑くなり、セミが鳴き、蚊も急激に増えます。そして酷暑熱波の 4 月、5 月になります。朝 30℃、日中は 40℃が当たり前で、草木は枯れてしまいます。暑さのせいか、セミも鳴かず、蚊も少なくなります。

そして 6 月、雷が鳴り始め、日本と時を同じくして待ちに待った雨が降り始めます（右の写真）。熱帯性スコールなので土砂降りです。川が生まれ、山からは滝が流れ、草木は新緑をまといます。連日の豪雨で洪水となり、アスファルトが流れ、昨日までの舗装路がぬかるみの道となって、大渋滞。列車も止まってしまい、学校は臨時休校となり、政府は企業に臨時休業を呼びかけます。そして停電も頻発します。ただ、最高気温は 30℃どまりで、湿気は高いものの過ごしやすくなります。8 月いっぱい豪雨の日が多く、9月には雨がおだやかになります。10 月になると激しい雷雨を伴って大気が入れ替わり、一気に乾季に突入します。この 10 月、11 月がセカンドサマーで、湿度は下がりますが暑さが戻ります。12 月中旬になると、暑さが和らぎ過ごし易くなります。 そして、小宅の隣にある池には、野生のフラミンゴが大群でやって来ます（下の写真）。

●星空

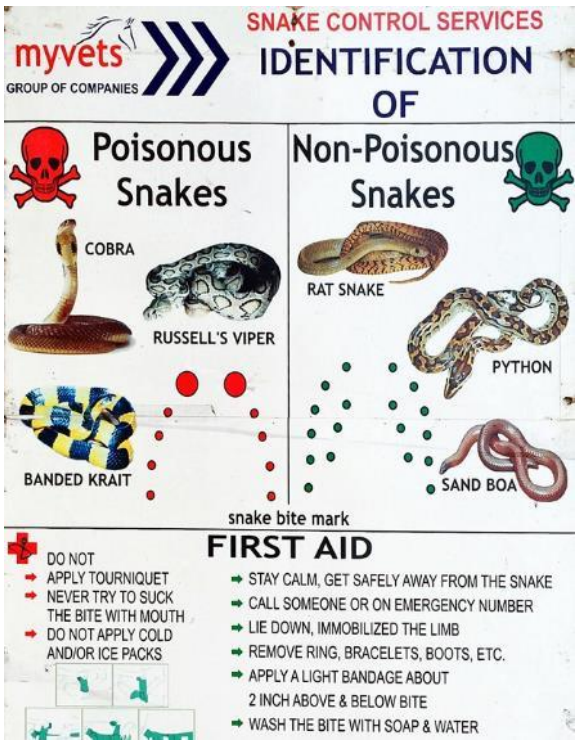
ムンバイは大都会、そして空気は日本よりはるかに濁っていますが、そこは南国。日本の本土からは見えにくい、見えない南天の星々を見ることが出来ます。

代表格は、中国や日本では老人星と呼ばれ、見ることが出来たら長生きできるといわれている、りゅうこつ座のカノープス、そして、あまりにも有名なサザン・クロス、南十字星です。下はカノープス周辺の拡大写真、右は全天 1 位の明るさを誇るシリウスと 2 位のカノープスです。なお、カノープスは伊豆下田から見えたことがあります。

そして、南十字星です。

●毒へび注意

ムンバイには、普通にコブラがいます。ゴルフ場、会社の敷地内の緑地帯、道の脇、・・・・



小宅があるコンプレックスの門の脇には、左のような絵が掲げられ、毒蛇と普通の蛇の見分け方（歯形の違い）や、応急処置について書いてありました。

以上、第 1 号として四季や自然を中心にご紹介いたしました。

次号以降は、人々の営みやビジネスライクな内容、インドならではのカオスな世界などもご紹介したいと思っております。